

## (3) 評 価

## ① 評価の方法

評価は、環境の保全上の目標と予測結果および環境保全のための措置を対比し、その整合性を検討するとともに、地盤(土地の安定性・地盤沈下)への影響が実行可能な範囲内で回避または低減されるか否かについて検討することで行った。

## ② 環境の保全のための措置

環境の保全のための影響の回避・低減対策は以下のとおり計画している。

## A. 工事中

- ・ 谷底堆積物や低位段丘層が分布している区域の内、中央の河川付替え付近の両サイドの盛土法尻と調整池内の盛土法面部についてはセメント系改良材による地盤改良を行う。
- ・ 厚さが1～2 m程度の軟弱層の場合は、ズリによる置き換えを行う。
- ・ 付替河川により河床を1～2 m上げるため、付替河川付近では現状を地盤改良し、良質土の盛土を1～2 m行う。
- ・ 盛土部分に根株や枝葉等、腐って空洞ができるものは埋めないよう現場作業員に徹底する。

## ③ 環境の保全上の目標

地盤(土地の安定性・地盤沈下)の環境の保全上の目標は、生活環境の保全上支障を招かないことを基本として、次のように設定した。

土地の安定性に支障を生じないこと。  
地盤沈下を生じさせないこと。

## ④ 環境の保全上の目標との整合性の検討

## A. 土地の安定性に及ぼす影響

円弧すべり計算による斜面の安定性の検討の結果、検討対象とした6断面については、いずれのケースでも最小安全率は基準を上回っており、安定性は確保されると予測されたことから、環境の保全上の目標と整合している。

ただし、現地で土質調査は行ったものの代表地点の特性のみをもって予測を行っているため、予測地点として選択しなかった区域内の切土斜面および盛土斜面については、現地盤の土質・地質、盛土材の特性等が解析諸元と同等または同等以上であるかを確認する必要があり、また軟弱地盤上についての盛土は動態観測等の品質管理が最も重要であることから、造成工事にあたって沈下量・隆起量および水平移動量の地盤変形観測や現地発生盛

土材の土質試験を実施し、予測・評価の妥当性を確認する。

B. 地盤沈下を生じる可能性

現地調査から判明した軟弱地盤に対して対策を実施するとともに、盛土の安定性を損なわないよう工事を行うことにより不同沈下は生じないと予測されたことから、環境の保全上の目標と整合している。

⑤ 評価

予測を行った各項目について、予測結果と環境の保全上の目標は整合が取れており、実行可能な範囲で影響を回避または低減できていると評価する。